**聖霊降臨節第７主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年６月30日**

**「恵みと憐れみの神」**

**ヨナ書4章1～11節**

 **4:1 ヨナにとって、このことは大いに不満であり、彼は怒った。**

 **4:2 彼は、主に訴えた。「ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。**

 **4:3 主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きているよりも死ぬ方がましです。」**

 **4:4 主は言われた。「お前は怒るが、それは正しいことか。」**

 **4:5 そこで、ヨナは都を出て東の方に座り込んだ。そして、そこに小屋を建て、日射しを避けてその中に座り、都に何が起こるかを見届けようとした。**

 **4:6 すると、主なる神は彼の苦痛を救うため、とうごまの木に命じて芽を出させられた。とうごまの木は伸びてヨナよりも丈が高くなり、頭の上に陰をつくったので、ヨナの不満は消え、このとうごまの木を大いに喜んだ。**

 **4:7 ところが翌日の明け方、神は虫に命じて木に登らせ、とうごまの木を食い荒らさせられたので木は枯れてしまった。**

 **4:8 日が昇ると、神は今度は焼けつくような東風に吹きつけるよう命じられた。太陽もヨナの頭上に照りつけたので、ヨナはぐったりとなり、死ぬことを願って言った。「生きているよりも、死ぬ方がましです。」**

 **4:9 神はヨナに言われた。「お前はとうごまの木のことで怒るが、それは正しいことか。」彼は言った。「もちろんです。怒りのあまり死にたいくらいです。」**

 **4:10 すると、主はこう言われた。「お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。**

 **4:11 それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。」**

**ルカによる福音書23章47節**

**23:47 百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。**

1.

**主に第5主日に読み進めて来たヨナ書は今日の4章が最後になります。前回の3章ではヨナがアッシリアのニネベの人たちに「あと40日すれば、ニネベの都は滅びる」と神様からの言葉を宣べ伝えたところ、ニネベの人たちはヨナの言葉を聞いて悪の道を離れて神様に悔い改めたのです。そうすると神様はニネベの人たちの姿を御覧になられて宣言した災いを下すことを思い直されたのです。ニネベの人たちを憐れんだというのです。**

**「神様が憐れんで下さってニネベの人たちは滅ぼされなくて良かったね」ハッピーエンド。もしヨナ書が3章までしかなかったら私たちはそのような感想を持つでしょう。でも、ヨナ書は3章で終わりではありません。4章まであります。ヨナ書は4章まであるということが大切なことなのです。ここに神様からの大切なメッセージが込められているのです。**

**4章はヨナの怒りから始まります。ヨナが不満に思った「このこと」とはニネベの人たちが悔い改めたことで神様があっさりと怒りを静めて深い憐れみを持って災いを下すことを思い直されたことです。ヨナは神様の言葉を語る預言者です。「あと40日すれば、ニネベの都は滅びる」と宣べ伝えて回ったおかげでニネベの人々の悔い改めに繋がり滅ぼされずに済んだのですから、本来であれば役に立てたことや人々が滅ぼされずに済んだことを喜ぶはずなのです。でも、ヨナは神様に怒ります。**

**「ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。**

 **主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きているよりも死ぬ方がましです。」（２～３節）**

**ヨナはニネベの人たちが悔い改めることも、神様がその悔い改めを受け入れて彼らを赦して下さることもわかっていたというのです。それは神様が「恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方」だから。だからこそヨナは神様が赦せないのです。**

**神様が「恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方」だから赦せない。まるで神様が思い直さずに当初の宣言通りニネベの人たちを滅ぼしてほしいと願っているような口ぶりです。**

**でも、実はそうなのです。ヨナは神様がニネベの人たちを滅ぼしてほしいと願っていたのです。イスラエルの民であるヨナによってアッシリアのニネベの人たちは異邦人であり、イスラエルの国や人々に脅威をもたらすいわば敵なのです。悪と罪に満ちた異邦人アッシリアの人々が神様に滅ぼされてしまったとしたら、イスラエルの国は平和でいられるわけなのです。ヨナはあの罪深い異邦人であるニネベの人たちが悔い改めることで、いとも簡単に神様が滅ぼすことを思い直されたその神様の憐れみに対して怒りをぶつけるのです。神様あなたは間違っていますと言わんばかりです。**

**ルカによる福音書15章11節以下（139頁）に「放蕩息子のたとえ」が記されています。そこに出てくる兄の姿がヨナにそっくりなのです。**

**ある人に二人の息子がいて、その息子のうちの弟が父親の財産の分け前をもらって遠い国で放蕩の限りを尽くしました。弟は身も心もボロボロになって家に帰ったら父親はその息子を憐れみ走り寄って迎え入れ盛大な宴会をしました。ところがそのことを知った兄は怒って家に入ろうとしません。父親は兄をなだめました。しかし、兄は不満たっぷりに父に言います。**

**『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。**

 **ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』（ルカ15：29.30）**

**兄は赦せないのです。弟も赦せないけどもっと赦せないのは、あんな放蕩の限りをつくして多くの罪を犯した弟を憐れむ父なのです。父の憐みが間違っていると言わんばかりに父に怒りをぶつけるのです。**

**この父親の姿は神様の姿を表しています。どんなに放蕩の限りを尽くし罪を犯しても神様に立ち帰る者を神様は深く憐れんで下さるのです。それは異邦人であってもユダヤ人であっても誰であっても悔い改めて立ち帰る者を神様は憐れんで下さるのです。でも、兄はその父親の愛を神様の愛を赦せないのです。**

**今のヨナの姿はまさに放蕩息子の兄と同じです。弟を裁き、父親を裁き、さらには神様を裁いてしまっているのです。それはヨナが自分なりの正義感によって裁くことによってヨナ自身が罪を犯してしまっていることに気が付かないのです。自分は正しい、人は間違っている、神様が間違っている。その裁きの思いにある時にヨナだけでなく私たちの誰もが神様から離れてしまうのです。それは言い換えれば自分が神になってしまうのです。神様よりも自分の方が上になってしまって、つくられたものである私たちであるにもかかわらずつくり主である神様を裁いてしまうという罪を犯してしまうのです。**

**そんなヨナに対して、神様は「お前の怒りは正しいのか」と問われて、ニネベの都を出て神様がさらに思い直してニネベの人たちを滅ぼされるのを見届けようとするヨナを守るためにとうごまの木を伸ばして陰を作られます。ところが神様は翌日に虫に命じてとうごまの木に登らせて食い荒らされ木は枯れてしまいました。またもやヨナは怒ります。「それは正しいことか」と問われて「もちろんです。怒りのあまり死にたいくらいです」と答えます。すると神様は言われます。**

**「お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。**

 **それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。」（10～11節）。**

**ここで「惜しむ」と訳されている言葉は元の言葉では「憐れむです」。ヨナが自分で植えたのでもないとうごまの木を憐れんだのなら、どうしてわたしが12万人以上の右も左もわきまえない人間と無数の家畜を憐れまないでいられようか。**

**とうごまの木の出来事を神様の憐れみを頭でなくて体で体験させられたヨナにとってこの神様の言葉はどう響いたでしょうか。神様のこの問いに対するヨナの答えは聖書に記されていませんが、ヨナは自分自身も自分が憐れむとうごまの木のように、さらにはニネベの人たちのように神様に背くだけでなく神様を裁こうとすらする自分こそが裁かれなければならない罪人なのに、ただ神様の憐れみによって赦されて今あることに気づかされたのではないでしょうか。右も左もわきまえない12万人以上の人々に自分も含まれる、その神様の憐れみに気づかされたのではないかと思うのです。**

**昨日、教会2階の執務室で説教準備をしていたら急に雨が降り出しました。私は慌てて窓を閉めました。中のものが濡れたら困るからです。そして「雨が降り続いたら帰る時に困るな～。体が濡れるのが嫌だな～。」と思った時にはっと気づかされました。もちろん雨の降りすぎは災害になるので困りますが、適度に雨が降らないと農作物や飲み水に困るのです。ですから雨は恵みの雨なのです。それが自分の事しか考えられなくて「濡れるが嫌だな」としか考えられなかったら、とうごまの木のことで怒っているヨナと一緒だなと思いました。私たち人間というのはヨナと一緒で結局は自分中心にしかものを考えられない罪深い存在だなと改めて気づかされました。**

**ヨナはとうごまの木が枯れたことを怒っているのも、罪深いアッシリアの人々が悔い改めたことで神様が怒りを静めて深く憐れまれて滅ぼすことを思い直されたことを怒っているのも結局は自分中心に物事を考えて、自分の中でこれは正しいとこれは間違っていると判断して神様にすら「あなたの憐れみは間違っている」と文句を言うのです。神様の憐れみの深さもわからないで自分中心に物事を考えて自分の正しさを主張するのです。**

**このヨナの姿は私たちの姿です。神様の前に罪を犯してしまうその姿は、右も左もわきまえない12万人以上の人たちの中にヨナもそして私たちも含まれるのです。右も左もわきまえない、言い換えれば自分が何をしているのかわからない罪に満ちた姿です。**

**イエス様は十字架上で言われました。「父よ、彼らをお赦しください、自分が何をしているのか知らないのです。」（ルカ23：34）イエス様を十字架につけ自分が何をしているのかわからない罪人の私たちのためにイエス様は執り成しの祈りをして下さいました。そのイエス様が十字架上で死を遂げられた時、自分が何をしているのかわからないその一人の百人隊長は「本当に、この人は正しい人だった」と信仰の告白をして神様を讃美しました。「本当にこの人は正しい人だった」この告白は「イエスは主である」との信仰の告白に繋がります。**

**自分が何をしているのかわからない私たちです。そんな私たちを神様は深く憐れんで下さりイエス様の十字架の死と復活によって罪を赦して下さり救ってくださいました。私たちはその神様の深い憐れみに日々感謝をして、「イエスは主である」この信仰の告白を日々行って信仰の歩みを主と共に歩んでいきましょう。**